

## 2021年12月19日降臨節第4主日説教

ミカ書 5章1-4節

ヘブライ人への手紙 10章5-10節

ルカによる福音書 1章39-45節、《46-55節》

本日は、降臨節第4主日です。ろうそくも4本目となりました。4本目のろうそくの意味は、「平和」とすることが一般的のようです。また、そのように考えるのは、イエス様が誕生した時の天使たちの賛美、「いと高きところには**栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ**」（ルカ2：14）が起源と思われませんが、本日の福音書箇所は、そこではありません。イエス様が誕生される前のお話です。

イエス様の誕生のお話を記しているのは、「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」だけですが、それぞれ「マタイによる福音書」は、ヨセフの視点で、「ルカによる福音書」は、マリアの視点で描かれていると言えます。また、マリアは、洗礼者ヨハネの母となるエリサベトと、対比するような形で書描かれています。しかし、この二人の女性についての記述は、単なる対比以上に深い関わりがあります。

洗礼者ヨハネに対する誕生告知は、母となるエリサベトではなく、父となるザカリアの方に告げられます。しかし、イエス様の誕生告知は、天使ガブリエルが直接母マリアへイエス様の誕生を告げます。有名な受胎告知と呼ばれるお話です。その後マリアは、エリサベトを訪ねるのですが、本日の福音書箇所は、その訪問のお話です。本日の聖書箇所の後半部分には、有名な「マリアの賛歌」と呼ばれる歌が記されるのですが、その箇所は《》に入っています。本日は、福音書を中心に学びますが、本日の箇所より少し前のマリアへの受胎告知の物語（ルカ1：26-38）に触れつつ、訪問のお話から学びます。

マリアは、天使ガブリエルから「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」（ルカ1：30-33）とイエス様の母となることを告げられます。一般的には、まだ結婚前のマリアがイエス様を生むことが、大変な驚きとして注目されます。たしかに「マタイによる福音書」のお話は、「正しさ」に焦点を当てていますので、その出来事に注目するのは当然といえます。しかし、「ルカによる福音書」のお話ではそうとは言えません。天使にガブリエルの告知の内容は、それだけではないからです。

天使ガブリエルは、①未婚のマリアがイエス様の母となるであろうことを告げましたが、②イエスと名付けるべきであろうこと（イエスという名前の意味は「主は救い」、一般的な名前といえるが意味は重い）、③その子が、「偉大な人になるであろうこと（偉大とはその通り大人物、自分の子がそうなるという

こと)」、④(成長して)その人が「いと高き方の子と呼ばれるであろうこと(いと高き方とは主なる神様のこと、自分の子はその子となるということ)」、⑤「主なる神様が(その人に)父ダビデの王座を下さるであろうこと(イスラエルで最も偉大な王と同じ位置につくこと)」、そして、⑥その人は「ヤコブの家を支配するであろうこと(ヤコブの家とはイスラエルのこと、自分の子がイスラエル全体を支配するということ)」、そして、⑦「その支配には終わりが無いであろうこと(実現した支配が永遠に続くということ)」です。ガブリエルは、全部で七つの壮大な事柄を突然マリアに告げたのでした。

あえて「であろうこと」と表現したのは、動詞が全部未来形で書かれているからです。また、「であろう」と推測のように記しましたが、ギリシア語の未来形には、未来に確実に起こる事柄を示す意味もあります。その意味では、ここで天使ガブリエルは、突然若い未婚の女性マリアに、あなたには、これらの7つのことが未来に必ず起こりますと告げたのです。

当然マリアは、それらのことを信じられませんでした。それゆえ「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」(ルカ1:34)」と答えます。この応答は、男の子の誕生だけを否定しているようにも思えますが、7つの出来事の出発点から信じられないと考えることもできます。それゆえに、ガブリエルは、「**聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない**」(ルカ1:35-37)と語ります。ここでガブリエルは、二つのことをマリアに語り、信仰へと導いています。一つは、マリアの身に起こることが、聖霊による事柄であること、そして、もう一つは、親類のエリサベトにも不思議なことが起こっているということです。またそう言える根拠は、「**神にできないことは何一つない**」からでした。そこまで説明されたマリアは、「**わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように**」(ルカ1:38)と答えます。「**なりますように**」という表現は、「新約聖書」では珍しい希求法です。願望や期待を示す表現ですが、それゆえ、マリアは半信半疑であったともいえるのです。

さて、その後のお話が本日の箇所です。マリアは、ガブリエルの告知を信じたように思えますが、実際にはそうではありませんでした。「**そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した**」(ルカ1:39-40)とある通り、ガリラヤのナザレから、ユダの町へ会いに行くからです。エリサベトがいる町が、ユダの街のどこかは書かれていませんが、エリサベトの夫ザカリアは祭司の一人です。「**やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた**」(ルカ1:23-24)とありますが、おそらくエルサレムの近辺に住んでいたと思います。洗礼者ヨハネが誕生したであろうという場所に教会が、エルサレム西郊外のエン・カレムにありま

す。ナザレから行きますと、エン・カレムは直線距離で約100キロです。ベツレヘム（直線距離で約110キロ）よりは近いですが、かなりの距離があります。マリアは、ヨセフと一緒に、クリスマスの物語で有名なベツレヘムへの旅をする前に、一人でそこまで行ったことになります（当時の成人男性の一日の移動距離・徒歩は約30キロです）。「**急いで山里に向かい、ユダの町に行った**」という一言で済まされていますが、決して簡単な確認作業ではなかったと思います（東京聖三一教会から直線距離約100キロは、北ですと栃木県宇都宮市、西ですと山梨県の甲府市、東ですと千葉県銚子市です。南ですと海を渡って東京都大島町に行けます。そこまで歩いていくのは、すくなくともわたしには無理です）。「ルカによる福音書」の著者が、パレスチナの地理をよく知らなかったのも、簡単にこう書いてしまったとも言えますが、そうであったとしても女性が一人で旅をすること自体、当時は（今も）決して簡単なことではなかったと思います。

マリアの気持ちを推測しますと、突然天使が現れて（それ自体が信じられないということは別にして）、イエス様の誕生を含めて、七つのことを告げられ、単純にそんなことは信じられないと拒否したのであれば、ここまでの旅はしなかったと思います。あるいは、心から信じていて、疑う余地もない、そのように思っていたら、また同じように確認する必要はなかったと思います。そこから考えますと、半信半疑であったので旅をしたのは、確かであると思います。しかし、単に半信半疑の事柄を確認するためだけに、それだけの旅をするのかということ、よほど探求心の強い人ということであれば、そのような旅はしなかったと思います。ここまでの記述では、何がマリアをここまでの旅に促したかは書かれていません。その答えは、46節以降のマリアの賛歌にあるからです。マリアは、そこで歌った事柄を待ち望んでいたのです。天使ガブリエルの言葉には、マリアの賛歌にあるような具体的な内容は記されていません。しかし、マリアはその告知に、主なる神様に望んでいた事柄の実現を見出したのでしょう。それゆえに、確認しなければならなかったのだと思います。

マリアの訪問は、エリサベトをも励ましました。「**エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った**」とマリアに祝福の言葉を語るからです。エリサベトも、マリアの訪問によって、自分の身に起こったことが、単になる自分個人の不思議な奇跡ということではなく、主なる神様の偉大な働きの一つであることを悟り、喜びと祝福の言葉を発したのだと思います。エリサベトは「**主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです**」と結んでいます。主なる神様への信仰として、時間を超えて大切な言葉ともいえま

す。

今日この物語から学びたいことは、信仰者としてわたしたちは、何を望んでいるのかということと、地上に信仰を確認する誰かがいてくれることの大切さです。

マリアが何を望んでいたのか、それは、マリアの賛歌から推測する事柄にほかなりませんが、マリアは、主なる神様がこの世界に、主なる神様の正義と平

和が満ちることを望んでいました。それは、貧富の差など様々な格差、違い、悲しむ人と喜び人が当然のように共存するようなこともない世界の実現です。そのことを心から望んでいたがゆえに、エリサベトに会って確認しなければならなかったのです。確認したら、それが現実となるからです。

もう一つは、エリサベトの存在の大切さです。マリアはエリサベトという人と出会いに行ったのです。そして、出会ったエリサベトが、彼女と共に喜び、彼女を賛美し、また彼女の信仰をほめたたえたことからこそ、マリアは信仰を確かなものとするのができたのです。物的な何かの存在を確認する、あるいは大切な宝物を取りに行くというお話はたくさんあり、またそのようなお話は、それを行う主体の努力や判断次第で結末が決まります。しかし、マリアの確認はそうではありません。エリサベトという人の対応次第で結末が左右されます。まさかですが、エリサベトが、マリアに対して信仰深い対応をしなかったら、マリアの信仰は確実なものとならなかつたかもしれません。しかし、マリアはエリサベトに出会うことを通して、またエリサベトは、マリアの訪問を通して、それぞれ信仰を深めたのです。最初に、「ルカによる福音書」は、マリアとエリサベトを対比していると申しましたが、対比以上に、両者とも主なる神様の業の実現のために不可欠であった、それぞれの存在も歩みも大切であったのです。

クリスマスの出来事、イエス様の誕生の出来事は、いろいろな小さい奇跡の集まりであると言われることがあります。確かに、「マタイによる福音書」の記述でも、本日見た「ルカによる福音書」でも、「おとめが身ごもった」という出来事だけではない、他にもある奇跡ともいえるような出来事によって、イエス様は誕生したといえます。しかし、それらの奇跡的出来事は、偶然何か落ちてきたような事柄ではありません。もちろん、人間の努力のたまものということでもありません。信仰者が、たとえすぐには実現しないと思っても、主なる神様に祈り続けてきた事柄、願い続けてきた事柄が基となって、そこに聖霊が働き、信じる人と信じる人との交わりを通して、実現した事柄です。それが、わたしたちの教会を含めて、すべての教会にとって大切な歩みです。そして、イエス様は、イエス様を信じることを通して、誰でもそのような歩みができることを、そしてイエス様を信じることを通して、信じる人々の交わりが深まることを示して下さいました。クリスマスとは、それらすべてのことが始まったこと、誕生したことを祝う時でもあります。

今年、12月24日クリスマス・イブの夕の礼拝は、いつも通りにはできませんが、いつもとは異なり、聖書の言葉を深く味わう礼拝をおこないます。12月25日の聖餐式は、すべての人と共に行いますが、たくさんの人と共に礼拝を捧げるといふ、今まで当たり前であったことを、改めて深く喜びたいと思います。それらのクリスマスのお祝いを通して、イエス様の母マリアと洗礼者ヨハネの母エリサベトが示した歩みを、わたしたちも続けたいと思います。そして、イエス様の母マリアが待ち望んだ平和の実現を、わたしたちも待ち望み続けたいと思います。